

平成 25 年度

公立高等学校入学者選抜学力検査
成績調査結果報告書

山梨県教育委員会

目 次

I 調査の概要	1
II 総合得点（全教科の合計点）の調査結果概要	1
III 教科別調査結果の概要	
国 語	2
社 会	4
数 学	6
理 科	7
英 語	9
* 得点の度数分布グラフ	12
* 平均点推移グラフ	18
* 正答率調査表	20

I 調査の概要

1 調査の目的

平成25年度山梨県公立高等学校入学者選抜のために実施した学力検査の成績結果の調査・分析を通して、本県公立高等学校志願者の学力の実態を把握し、本県中学校及び高等学校の教科教育向上のための資料とすることを目的とする。

なお、この調査は抽出調査による客観的資料であり、各教科の出題のねらいに照らしたものである。

2 実施日、調査教科

平成25年3月7日(木)

国語(55分)	9:30~10:25
社会(45分)	10:40~11:25
数学(45分)	11:40~12:25
英語(45分、うち「リスニング」約12分)	13:30~14:15
理科(45分)	14:30~15:15

3 調査対象者

全日制公立高等学校入学者選抜検査の全教科(5教科)を受検した者全員4,897人(男子2,611人/女子2,286人)を対象としている。

なお、正答率調査表については、上記受検者の中からの抽出者を対象としている。抽出人数は490人で、全体に占める抽出者の割合はおよそ10%である。なお、対象者の抽出に当たっては、全ての高等学校での受検者を対象に、その受検高等学校の受検者数に応じて、男女に関係なく、無作為に抽出した。

II 総合得点(全教科の合計点)の調査結果概要

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 中学校学習指導要領に示されている各教科の目標及び内容に即して、基礎的・基本的な事項を重視するとともに、応用力もみることができるように出題すること。
- ② 当該教科の各分野、領域及び事項にわたって偏りのないように出題すること。
- ③ 単に記憶の検査に偏らないように配慮し、思考力、判断力、表現力等を検査することができるよう工夫すること。
- ④ 全県的な視野にたって出題し、地域差による影響が生じないようにすること。
- ⑤ 特定の教科書等の使用者が有利になることのないようにすること。

2 得点別にみた度数分布

総合得点の平均点は277.0点で、前年度より10.3点高い。最高点は484点、最低点は12点であり、その得点分布は(図1-1 P12)に示すとおりである。

平均点を男女別に比較すると、男子は276.9点(前年度比+10.5点)、女子は277.1点(前年度比+10.0点)で、女子が男子より0.2点高い。その得点分布は(図1-2 P12)に示すとおりである。

3 平均点の推移

平成21年度から今年度入試まで5年間の全体平均点は(図1-3 P18)のように推移している。

Ⅲ 教科別調査結果の概要

○ 国 語

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 学習指導要領の趣旨に基づき、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の内容と、「関心・意欲・態度」、「知識・理解」をもちあわせる分野を網羅し、検査するものとし、併せて、全学年にわたり、全領域から偏りのない出題となるように配慮した。
- ② 話すこと、聞くことに関しては、話し合いの場面における議長の進行の仕方や発言の内容に関するものについて出題した。取り上げたのは、生徒会の「地域との関わりを大切にしよう」という活動方針のもと、環境美化委員会で委員長が説明するための原案を作成し、それを環境美化委員会で検討するという場面であり、中学生の身近な体験をもとにした。
- ③ 文学的文章については、サハラ砂漠での体験から、日本の豊かなイメージについて思いをめぐらせる内容の文章を取り上げた。文学的文章を正確に読み取り、内容理解ができるかどうかについて問うた。また、中学校国語科の目標に、「思考力や想像力を養い、言語感覚を豊かにし」とあり、その点についても配慮した。古典については、本文と関係づけて出題し、古典の基礎的な力を問う内容とした。
- ④ 説明的な文章については、「社会力」について取り上げた文章を出題した。これからの社会では、能動的に社会に関わり、社会を改善していこうという「社会力」が必要とされるが、このことについて深く考えさせるとともに、併せて、「社会力」の大切さについて、具体的な体験を思い起こしながら表現する力を問う出題内容とした。
- ⑤ 配点については、一領域の比重が大きくなりすぎないように配慮した。

2 得点別にみた度数分布

全体の平均点は66.3点で、昨年に比べて2.1点低い。最高点は98点、最低点は11点で、その得点分布は(図2-1 P13)に示すとおりである。

平均点を男女別に比較してみると、男子は64.7点、女子は68.1点で、女子が男子より3.4点高い。その得点分布は(図2-2 P13)に示すとおりである。

3 平均点の推移

平成21年度からの5年間の全体平均点は、(図2-3 P18)のような推移である。平成25年度は、5年間で3番目に高い平均点となっている。

平成21年度以降、男女の平均点の差は4点前後で推移しているが、平成24年度以外は、差の開きが4点以内である。

4 大問別の内容と調査結果の分析(正答率調査表 P20)

□ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(漢字の読み書き・係り受けに関する知識・書写)

一、二では、親近感や話題性のある短文を設定し、基本的な常用漢字の読みと書き取りを出題した。全般的にはよくできているが、一の読みのうち、イの「敢闘」の正答率が低い。二の書きのなかでは、イの「かんまつ(巻末)」の正答率が低い。どちらも、教科書で学ぶ熟語である。日常生活の場面で使われる漢字について、繰り返し学習したい。また、同じ読みの漢字の使い分けにも注意しておきたい。

三は、主部と述部の照応関係を正しく理解できるかを問う問題である。わかりやすく、意味が正確に伝わる文章を書くためには、文の成分の照応の関係を理解しておくことが大切である。

正答率は76.9%であり、文の成分の照応関係の理解に関して、やや不十分な面がみられた。

四の書写では、行書の「点画の連続、省略」といった特徴をつかみ、総画数を理解できるかを問う問題を設定した。生徒の日常生活において、授業で学習内容をまとめたり、会議で記録を取ったり、職場体験学習でインタビューの内容をメモするなど、文字を速く書く場面が増えてきている。そういう場面で、楷書に比べて速く書くことができる行書はとても便利な書体である。行書のさまざまな特徴を理解しておきたい。

正答率は51.0%であり、行書の特徴および総画数に対する理解に課題があった。

三 話すこと・聞くこと

一は、話すこと・聞くことに関して、話をするときに説得力のある表現の仕方に注意して、話の内容や話し手の意図にふさわしい語句の選択と文の効果的な使い方を問う問題とした。具体的には、委員長の高山さんが、委員会で活動方針の「二つの柱」について、目の前の委員の生徒を相手に説明するという場面を設定した。高山さんは、相手が同級生ばかりではなく、下級生もいるということを意識して、分かりやすく説明するために、聞き手の表情や反応に注意して説明している。

二は、話合いの流れに沿って意見を言う場面を設定した。このような場面では、どのようなことについて話し合われているのか、今までの発言者がどういう意図でその発言をし、何を伝えたかったのかをしっかりとらえ、「話合いが課題の解決に向かうように進め方を提案したり、話合いが効率よく進むように協力したりする」ことを意識して意見を述べるのが求められる。

具体的には、「一つ目の柱について意見はありますか」という議長の発言に対して、木村さんが「ポスターをはる」という「二つ目の柱」について意見を述べたことが、話合いを効率的に進めることへの配慮が欠けていることを理解できているかを問う問題とした。

正答率は、それぞれ86.9%、56.7%であった。

三 文学的文章 出典 『日本十六景』 森本哲郎 (PHP文庫, 2008年 8月刊) 『近世歌文集下』所収の「菅笠日記」 (新日本古典文学大系 岩波書店, 1997年8月刊)

※ 1996年3月和泉書院刊の『菅笠日記』も参照した。

一は、文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫についての出題であり、比喩表現について考える問題である。正答率は86.5%と良好な結果であった。近年の比喩表現についての出題のなかでは、比較的高い正答率であった。

二は、前後の文章の流れに注意しつつ、副詞の意味・用法について考える問題である。文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解することができるかどうかを問うた。選択肢のア・ウ・エは、どれも、辞書的な意味としては正しいものであるので、文脈の理解も必要となってくる。

正答率は68.6%であった。

三は、文章の展開を捉えながら、主題や要旨について考える問題である。「反世界」という言葉について尋ねた。サハラ砂漠は、日本の風土とはまさに対極にある世界であったが、見方を変えれば、日本の風土こそ対極にある世界、すなわち「反世界」であることに「ぼく」は気づいたのであった。この強烈な経験が「ぼく」の吉野への思いをかき立てたのである。

正答率は49.8%と低かった。サハラ砂漠と日本の風土との関係を「ぼく」がどう捉えたかを理解することができたかがポイントとなった。

四は、文章を読んで、登場人物の心情について考える問題である。正答率は85.5%であった。本文後半部分の「ぼく」の心情については、おおよそ十分な理解がなされた。

五の(1)は、古文に関して、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むことができるかどうかについての出題である。授業中に、音読を通して、「係り結び」の表現について理解が深められているかどうかを問うた。正答率は71.8%であった。

(2)は、歴史的仮名遣いの読み方に関する問題である。正答率は83.1%であり、歴史的仮名遣いの読み方の問題としては、例年よりやや低い正答率であった。

(3)は、文章を読み比べるなどして、構成や表現の仕方について理解することができるかどうかを問うた。吉野を説明するために、二つの文章の筆者は同じ和歌を引用している。そこに着目させ、表現の工夫について考えさせる問題とした。正答率は、38.4%であった。

四 説明的文章 出典 『子どもの社会力』 門脇厚司 (岩波新書, 1999年12月刊)

一は、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項についての知識を問うた。筆者は、文章中にことわざを引用し、文章の理解を深めるさせるために効果的に用いようとしているが、引用したことわざとしてふさわしいものはどれかを答えさせる問題である。正答率は93.9%であり、大問四の中では、もっとも高い正答率であった。

二は、接続詞の意味と用法の理解に関する問題である。接続詞の意味と用法に関する理解は、読むこと

の力の基盤となるものであり、本年度も出題することとした。正答率は、74.5%であった。基本的な出題であったが、誤答も少なからず見受けられた。

三は、内容把握に関する問題である。筆者が前半で紹介している実験で、新生児が、どのように模倣を行うかについて、模倣した対象を正確に読み取ることができるかどうかを問うた。正答率は89.4%であった。

四は、説明的な文章の論理展開の仕方に関する問題である。第二段階で身に付けるべき事柄については、第三段階でできているとされた文言の中に、正答となる一文が書かれている。ここを見つけて答える問題である。正答率は8.6%であり、今回の問題の中で、もっとも低い正答率であり、難問であった。

五は、文章の展開の仕方を捉える問題である。本文は、四つの意味段落で構成されているが、その論理構成を読み取り、それぞれの段落の役割について考えさせる出題とした。正答率は54.9%であった。

六は、表現の仕方や文章の特徴についての出題である。筆者がどのような工夫をして論理を展開しているのかを問うた。正答率は46.9%であった。

七では、「総合的な学習の時間に、この文章で説明されている「社会力」の形成方法について、内容を短くまとめて発表する」という言語活動を設定した。

(1)は、情報を活用できる力を問う問題である。正答率は86.1%であった。

(2)は、要旨を捉える力を問う問題である。正答率は42.2%であった。

八は、「書くこと」領域の問題である。本文を読んで「社会力の大切さ」について考えたことを、条件にしたがって記述する力を問うた。配点15点のうち、0～5点の分布の計が23.5%、6～10点が65.0%、11～15点が11.6%であった。

5 全体を通しての考察

常用漢字の読み書きなどの基本は、おおよそ身に付いており、訓読みについても良好な結果であったが、行書の特徴についての理解においては、十分に習得されていない面も見られた。また、言語生活という面では、実際の話合いの場面で、話の流れを十分に把握しながら、適切な方向に話合いの流れを導いていくことに関して、理解が不十分な点が見うけられた。また、説明的な文章において、文章全体の構成を把握しつつ内容の理解を深めていくという点においても、不十分な点がみられた。

国語力全体としては、ここ数年と同様に、良好な検査結果であり、無答数も少ないことから、国語への興味・関心の高さも伺われた。古典については、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことを一層進めていき、伝統的な言語文化への興味・関心を高めていきたい。

本来は易しい問題であっても、考えて書く記述式の出題形式となると、正答率が低くなる傾向にあり、また、文章全体を俯瞰して考える問題においても、正答率が低くなる傾向がみられた。言語活動を通して、思考力、判断力、さらには表現力の育成が行われなければならない所以であろう。

○ 社 会

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 地理的分野、歴史的分野、公民的分野の三分野にわたって、基礎的・基本的な学力が検査できるように配慮した。
- ② 写真、図、表、グラフなどの資料をとおして、思考したり、判断したり、表現したりする力を問い、また、多面的・多角的な資料活用能力を問うようにした。
- ③ 中学校学習指導要領の趣旨に沿った出題に心がけるとともに、身近な地域である山梨に関する題材をできるだけ取り入れるように配慮した。

2 得点別にみた度数分布

平均点は52.7点で、前年度(50.1点)より2.6点高かった。最高点は99点、最低点は0点であった。得点分布は(図3-1 P14)に示すとおりである。

平均点を男女別にみると、男子は53.3点、女子は52.1点で、その得点分布は(図3-2 P14)に示すとおりである。男子は、女子より1.2点高かった。

3 平均点の推移

平成21年度から今年度まで5年間の社会科の平均点は(図3-3 P18)のように推移している。平成21年度から続けて数点ずつ低下して平成23年度が最低であったが、平成24・25年度は上昇した。その理由としては、受検生が記述式の問題や文章で表現する形式の問題に対応できるようになってきていると考えられる。一方で、図やグラフなどの資料(特に地理分野)を読み解く知識・技能は十分ではないと思われる。また、男女別比較でみると男子が女子を上回る傾向が続いていたが、その差が縮まる傾向が見られる。記述式の問題に対して、国語力(国語の平均点)の高い女子の点数が伸びていることが背景にあると考えられる。

4 大問別の内容と調査結果の分析(正答率調査表 P20)

① 地理的分野

1の世界の地理に関する問題ではブラジルの産業構造の変化の様子を問う問題、EUの課題をグラフと表を関連させて答える問題で正答率が高かった。ただし、EUの課題に関する問題では正答率が60%を超える一方で、無答が6.1%あった。

2の日本の地理に関する問題においては、(4)を除いて、正答率が60%を超え高かった。(2)の「近郊農業」を答える問題では正答率が62.0%であったが、無答の割合も11.2%と高く、基本的な用語であっても実際の社会の状況と関連付けて考えることに課題が見られた。(4)の各都道府県の人口、面積、産業の様子から都道府県を確定する問題では正答率が31.4%と低かった。各都道府県の特徴の理解度と資料をいくつかの側面から読み解く力に課題が見られた。

② 歴史的分野

「土偶」や「前方後円(墳)」,「租庸調」,「シベリア出兵」など歴史的分野の学習における基礎的・基本的な事項の理解はある程度定着していることが分かった。しかし、一方で同じように基礎的・基本的な事項である「キリシタン大名」や「地租改正」を答える問題では無答の割合が高く、正答率を下げる要因となった。単純な用語の問い方でなく、年代や具体的な事象に関連付けて問うたことが無答の割合を高くしたと考えられる。用語の暗記だけでなく歴史事象と関連付けて理解することに課題がみられた。

③ 公民的分野

全体的には入試直前の学習内容であるだけに、例年どおり地理的分野や歴史的分野に比べ正答率は高かった。しかし、「衆議院の解散」や「最高裁判所裁判官の国民審査」,「条例制定についての直接請求権」など資料や場面設定を通し具体的な状況に関連付けて理解していなければならない問題での正答率が低かった。

また、憲法改正や地方自治体の財政に関する問題のように、指定された語句や形を用いて説明する問題での無答の割合が10%を超え高かった。与えられた条件の下で社会的事象を説明する力に課題が見られた。

④ 三分野総合

第一次世界大戦後の世界の主な出来事、ナチスによるユダヤ人迫害に関する問題など基本的な知識を問う問題での正答率は高かった。

そのような中で、「ベルリンの壁崩壊」と「米ソ首脳会談(マルタ会談)」から「冷戦の終結」を導き出す問題では、無答の割合が18.6%と全ての問題の中で最も高かった。また、国連予算の特徴を説明するために必要な資料を選ぶ問題での正答率は7.1%と全ての問題の中で最も低かった。

5 全体を通しての考察

地理的分野、歴史的分野、公民的分野のいずれにおいても、最も大切なことは基礎的・基本的な知識の理解をより深く確実にすることである。

そのためには、一つの事象をただ単に用語としておぼえるのではなく、因果関係など時間的・空間的広がり意識しながら勉強したり、具体的な社会事象と関連付けながら理解するよう学習することが大切である。日頃から重要な項目だけを無理に暗記しようとする学習ではなく、疑問点をもってじっくり学習し自分の言葉で説明できるところまで学習を進める姿勢が求められていると思われる。

社会科では思考力や判断力、表現力が求められているが、その基盤には社会的事象に関する興味や関心を持ったり、個々の事象について広がりを持った確かな知識を身に付け理解したりすることがなければならぬ。

○ 数 学

1 出題のねらい、配慮事項

数と式、図形、関数、資料の活用の各領域にわたって、基礎的な概念・原理・法則の理解や、数学的に表現し処理する能力の把握に重点を置きながら、事象を数理的に考察する能力や数学を活用する態度が検査できるよう、次の点に配慮して出題した。

- ① 身近な課題に対して、主体的に解決する力が検査できるようにした。
- ② 知識や技能を活用して、問題を解決する力が検査できるようにした。
- ③ 複数の領域にわたって、総合的に考える力が検査できるようにした。
- ④ 記述式の解答形式を増やし、思考過程や問題解決の手順などが検査できるようにした。

2 得点別に見た人数分布

平均点は50.3点で、昨年より2.1点高い。最高点は99点、最低点は0点で、その得点分布は(図4-1 P15)に示すとおりである。

平均点を男女別に比較してみると、男子51.2点、女子49.2点で男子が女子より2.0点高く、昨年と同様の傾向である。その得点分布は(図4-2 P15)に示すとおりであり、70点以上において、男子の構成比が女子のそれを上回っている。

3 平均点の推移

平成21年度から今年度入試までの5年間の全体平均点は(図4-3 P19)のように推移している。数学的な見方や考え方を問う問題や思考過程を記述する問題、理由を記述する問題を取り入れてきたが、全体では50点前後を推移してきている。今年度は、平成21年度以来、50点台となった。

4 大問別の内容と調査結果の分析(正答率調査表 P21)

① 「数と式の四則」(基本)基礎的・基本的な数式の処理ができるか。

全体的には高い正答率であった。6問中4問が90%を超えた。最も正答率の低いものは、分数の係数をもつ多項式の加減で正答率は69.2%である。基本的な計算処理については、ほぼ十分な定着がうかがえるが、通分して同類項をまとめるために、分配法則を用いることが必要になることなど、高度な計算には課題が残った。

② 「基礎的事項」(基本)基礎的な知識に基づく表現や処理ができるか。

移行措置の内容である2次方程式の解の公式を用いて解を求める問題が72.0%、メジアンを答える問題が68.2%、確率を問う問題が68.8%、角度の関係を問う問題が79.0%であった。確率の正答率が想定よりもやや低く、同色の玉の処理を誤り正解できなかった誤答例も見受けられた。作図問題では、今年は3年次に学習する「円外の点から接線を引く」問題で、56.7%と想定より高い正答率であった。

③ 「数と式」(標準・応用)身近な事象において、式に表現したり、式を用いて事象を的確に処理したり、式の意味を読み取り説明したりすることができるか。

式の表現方法については、78.6%であり、ほぼ想定したものであったが、実際の数値での求値については76.3%と想定を約10%下回った。また、身長差を求める問題では、26.3%と想定を大きく下回るだけでなく、23.9%が無答であり、文字を用いた式の扱いに課題が残った。結論を記号で答え、その理由を記述する問題では、記号の正解が65.7%であったが、理由も含めた正解では部分正答も含め、39.4%であり、根拠を明らかにしながら記述することについて、継続した指導が必要となる結果となった。

- ④ 「1次関数・平面図形」(標準・応用) 事象を関数として捉え、グラフに表現したり、平面図形の基礎的な知識や技能を用いて考察し、的確に処理することができるか。

1, 2については点の移動についての的確に把握できると十分に解答できる問題であったが、1(1)については65.1%, 1(2)については14.9%(部分正答を含めても22.9%), 2については、42.2%と想定を大幅に下回った。題材は教科書でも扱われている問題であり、事象を数式を用いて表現し処理する部分で課題が残った。3については、(1)の正答率が52.4%とまずまずの出来であったが、(1)の結果を踏まえた(2)では正答率が7.6%であり、問題全体として受検生が適切に処理できていたかどうかについて不安を残す結果となった。

- ⑤ 「関数・図形」(標準・応用) 関数について基礎的な事柄を求め、平面上の図形における数量の関係について、座標を用いて考察し処理することができるか。

1(1)は2次関数の変域に関する基本的事項についての問題であり、正解率は69.6%であった。過去と比べて、正答率は若干上回った。1(2)については直線の式を求める問題であったが、56.3%で若干想定正答率を下回った。1(3), 2については座標を用いて線分の長さや格子点の個数を計算していくことが基礎となる。特に2(1)については、座標の取扱いに課題が見られ、正答率は22.9%と想定よりも大幅に下がった。初めて目にする問題に対する対応力や図形的に観察したときの関係を見出す力に課題が見られた。

- ⑥ 「平面図形」(標準・応用) 平面図形を、基礎的な知識を用いて考察するとともに、推論の過程を論理的に表現することができるか。

1は4点を通る円の中心位置を問う問題で、正答率は28.0%(部分正答を含めて34.3%)であった。誤答例を見ると、中心の位置は理解しているものの、数学の用語を用いて正確に記述できなかったものが見られ、言語活動の充実とあわせて、数学的に表現する力を養う指導が必要であると感じた。2の相似の証明では例年よりも難易度を上げたため、正答率は19.6%と下がったが、部分正答も含めると57.4%であり、まずまずの結果であった。

- ⑦ 「空間図形」(標準・応用) 空間図形を、基礎的な知識や技能を用いて考察し、的確に処理することができるか。

1は正四角錐の高さ求める問題で、正答率は46.7%と想定(60%)よりも下回った。理由としては、正答を導く方法として、三平方の定理を用いるか、直角二等辺三角形の辺の比を用いる方法が考えられるが、いずれも一度の処理では求めることができないため、単純に求めることができないことが考えられる。2については、立体を把握し、体積を求められる立体に分割していくことがポイントとなるが、面積の場合(④3(2))も分割して求めることが難しかったことから、体積に対しては非常に難しかったと考えられる。正答率は0.8%であった。

5 全体を通しての考察

基礎的・基本的な知識や技能については、ほぼ十分な定着がうかがえる。しかし、事象を数学的に表現する力や基礎的事項を複数回活用して処理する力、他の項目と組み合わせて考える力については、課題が残る結果となった。また、既習事項に結び付けていく力や状況をきちんと捉える力も得点差としてあらわれる結果となった。数学的な見方や考え方を磨き、創造的な思考力を身に付けるために、多様なアプローチができる問題に様々な角度から取り組む経験やねばり強く考えること、自らの考えを言葉で表現したり、式・図形などを用いて数学的に表現したり説明したりする授業を充実することが、なお一層必要であろう。

○ 理 科

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 学習指導要領の趣旨に基づき、「自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行う」ことに留意した。また、理科への興味・関心、思考力・表現力等が見られるように配慮した。
- ② 全学年にわたり、移行措置内容も踏まえ、第1分野、第2分野の全領域から偏りがなく学力の検査ができるようにした。

- ③ 観察、実験を重視し、自然の事物・現象を理解するための基礎的・基本的事項についての学力が検査できるように配慮した。
- ④ 思考過程や問題解決の手順など論理的な思考力が検査できるようにした。
- ⑤ 日常的な自然現象に関心を持ち、学習したことを基に考えようとする力を検査できるように配慮した。
- ⑥ 身近な材料を使い学習内容を確認することで、実社会・実生活との関連を実感できるように配慮した。

2 得点別に見た度数分布

平均点は、54.1点で前年より7.0点高い。最高点は100点、最低点は0点で、その得点分布は(図5-1 P16)に示すとおりである。

平均点を男女別に比較してみると、男子は55.5点、女子は52.6点で、男子が女子より2.9点高い。男女別の得点分布は(図5-2 P16)に示すとおりである。

3 平均点の推移

平成21年度から今年度までの5年間の全体平均点は、(図5-3 P19)のように推移している。平成21年度から平成24年度までは40点台を推移してきたが、今年度は50点台になった。問題の難易度は昨年度並みであったが、選択問題をやや多くした結果、それらの正答率が高く、平均点が上昇した。

また、男女別比較でみると、毎年男子が女子を上回っている。

4 大問別の内容と調査結果の分析(正答率調査表 P21)

1 「生物と細胞」「生物の殖え方」

からだが1つの細胞でできている生物について理解しているかを確認した。また、動物の生殖細胞や生殖と発生の過程における染色体の数、胚について理解しているかを確認した。さらに、無性生殖における形質の伝わり方を理解し、論述により表現できるかを確認した。基本的な問題が多く、全体的に正答率は高かったが、生殖と発生の過程における染色体の数に関する問題の正答率は37.6%と予想より低かった。

2 「日本の天気の特徴」

停滞前線の前線記号を理解しているかを確認した。停滞前線の位置が北上した理由を太平洋高気圧の勢力と関連付けて、説明できるかを確認した。また、天気図から等圧線の特徴を読み取り、観測地点の風向を判断できるかを確認した。さらに、水蒸気により台風が発達することと雲が発達する所では、上昇気流が生じていることを理解しているかを確認した。全体的に予想より正答率は低く、特に、停滞前線に関する作図問題、論述の問題の正答率はそれぞれ26.1%、21.6%と低く、課題が見られた。

3 「身の回りの物質とその性質」「化学変化と電池」

密度を正しく理解し、計算によって質量が求められるかを確認した。実験内容、実験結果を理解し、金属の反応性と電極・電圧の関係を正しく判断できるかを確認した。電流の流れ、電子の動きについて正しく理解し、電池の+極で発生する気体が判断できるかを確認した。また、+極で起こる変化を理解し、論述により表現できるかを確認した。密度に関する計算問題、電池の電極で起こる変化を論述する問題の正答率はそれぞれ26.1%、16.3%と低く、課題が見られた。

4 「音の性質」

弦の音が高くなる実験操作を正しく理解しているかを確認した。測定結果のグラフより音の振動を読み取り、振動数を求めることができるかを確認した。また、弦が太くなったときの音の高さを判断し、理由とともに論述により表現できるかを確認した。さらに、測定結果と音の伝わる速さより、スピーカーから観測者までの距離を求めることができるかを確認した。基本的な問題が多く、全体的に正答率は高かったが、計算問題の正答率は29.2%と低く、課題が見られた。

5 「葉・茎・根のつくりと働き」「生命を維持する働き」

実験結果を正しく理解し、光合成の働きにより葉でデンプンができたことを判断して、論述により表現できるかを確認した。酸素と二酸化炭素の体積の割合の変化を正しく判断できるかを確認した。また、光

が十分に当たっているときの酸素の出入りを正しく理解しているかを確認した。さらに、ヒトの呼吸において酸素が血液中の赤血球によって運ばれ、組織液を介して細胞に届けられることを理解しているかを確認した。基本的な問題が多く、全体的に正答率は高かった。

6 「地震の伝わり方と地球内部の働き」

震央について理解しているかを確認した。表から初期微動継続時間を読みとり、グラフに表すことができるかを確認した。地震計の記録と観測記録より、観測地点から震源までの距離を求めることができるかを確認した。また、地震計のしくみについて理解しているかを確認した。さらに、日本付近のプレートの境界で起こる地震のしくみについて論述により表現できるかを確認した。全体的に正答率は高かったが、論述問題の正答率は31.0%と低く、課題が見られた。

7 「化学変化と物質の質量」

石灰石とうすい塩酸の反応を正しく理解し、発生する気体を判断して化学反応式が完成できるか、反応後の溶液の液性が判断できるかを確認した。また、化学反応における反応物質同士の量的関係を正しく理解し、論述により表現できるかを確認した。さらに、化学反応における反応物質と生成物質の質量変化の規則性を正しく理解し、未反応の物質の質量を計算によって求めることができるかを確認した。反応の量的関係について論述する問題、実験内容やグラフを正しく理解して質量を求める計算問題の正答率はそれぞれ25.9%、18.2%と低く、課題が見られた。

8 「力のつり合い」「仕事とエネルギー」

物体にはたらく二つの力がつり合う条件を正しく理解し、論述により表現できるかを確認した。斜面に置いた物体にはたらく重力、分力を正しく理解し、図示することができるかを確認した。動滑車を使った場合と使わなかった場合の力と仕事について正しく理解しているかを確認した。仕事の原理を正しく理解し、斜面に沿って物体を引き上げるときの物体の移動距離を計算によって求めることができるかを確認した。論述問題の正答率は36.7%と予想より低かった。また、計算問題の正答率は26.9%と低く、それぞれ課題が見られた。

5 全体を通しての考察

中学校の学習指導要領に示された目標・内容に則して、基本的な学力及び思考力や表現力を測ることができる形式の問題を多く出題した。問題の難易度は昨年度並みであったが、選択問題をやや多くした結果、それらの正答率が高く、平均点の上昇が見られた。昨年度と同様に、知識を活用し表現する力を見るために、理由や説明を求める論述問題を各大問に出題した。論述問題の正答率にやや上昇が見られたが、基本的な知識やグラフ等を活用して正答を導く問題は正答率が低かった。正確な知識の定着と同時に、知識を活用して思考する力の育成が望まれる。

○ 英 語

1 出題のねらい、配慮事項

- ① 中学校学習指導要領に示されている外国語の目標及び内容に即して、基礎的・基本的な事項の理解度を評価できるように配慮し、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の各領域にわたって出題し、総合的な英語の学力が検査できるようにした。
- ② 学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」などの実践的コミュニケーション能力を重視していることから、リスニングテストに言語の使用場面や発話の意図に関わる問題を取り入れ、リスニングテストの比重を約30%とした。
- ③ 「読むこと」については、昨年度と同程度の語数の長文により、生徒の英語を理解する能力を様々な方法で検査できるようにした。また、与えられた日本語の内容に合う英文を書かせる英作文や、読解した英文等を活用して日本を紹介する英文を書かせるなど、自己表現させる問題を取り入れることによって、実践的コミュニケーション能力の重要な要素である「表現力」も検査できるように配慮した。自己表現に関する設問の採点にあたっては、コミュニケーションを妨げないようなミスは減点の対象としないこととした。

2 得点別に見た度数分布

平均点は53.6点で、前年より0.7点上がったがほぼ昨年と同程度であった。最高点は100点、最低点は0点で、その分布は(図6-1 P17)に示すとおりである。

平均点を男女別に比較してみると、男子は52.3点、女子は55.1点で、女子が男子より2.8点上回った。男女別の得点分布は(図6-2 P17)に示すとおりである。

3 平均点の推移

平成21年度から今年度入試までの5年間の全体平均点は(図6-3 P19)のように推移している。

今年度の平均点は昨年度を若干上回った。大問1~3は主に「聞くこと」に関する力を検査している。大問1は今年度は選択問題ではなく記述する問題に変更されたが、昨年同様に平均点は高く、受検生に一定の「聞く力」が養われていることがうかがわれる。大問4及び5の英文については、語数を昨年度に引き続き総計で1000語程度にし、まとまった英文を限られた時間内に的確に理解する力を検査できるようにした。「読むこと」に関する力と「書くこと」に関する力を総合的に育成していくことが求められる。

また、男女別比較でみると、昨年同様女子が男子を上回っているが、その差は2.8点と昨年の3.9点に比べ若干縮まっている。

4 大問別の内容と調査結果の分析(正答率調査表 P22)

① 「聞くこと」に係る問題

英文を聞き取り、メモを完成させる問題。英文を聞き取った上で、解答に必要な情報を選び出す力を試す問題である。日常生活で起こりうる状況を設定し、英文を聞き取る基礎的能力を検査できるようにした。

平均正答率は91.5%と昨年の90.7%をやや上回り、基本的な聞き取り能力は良好といえる。

② 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」に係る問題

短い会話を聞いて問いに対する答えを選ぶ問題で、様々な場面でのコミュニケーション能力を検査したり、言語の使用場面や発話の意図を理解できるかを評価したりできるようにした。

平均正答率は、92.8%と昨年度の74.4%より約18.4%上がった。

③ 「聞くこと」「読むこと」に係る問題

まとまった内容の英文を2つ聞いて、各英文の内容に関する質問に答える問題。各英文のテーマや文脈を理解した上で、内容に関する質問を聞き取り、適切な答えを選択できるかを試しているもので一昨年度より導入された問題形式である。

平均正答率は74.9%と昨年度の75.1%と比較すると若干下がった。1-1の正答率が44.3%と他と比較して低かったのは、解答となる箇所を別の表現で置き換えることが難しかったためと考えられる。

④ 「読むこと」「書くこと」に係る問題

中学生の陽子が、地域のお祭りについて、興味深いエピソードを祖父から聞いて学んだことなどを例に、お年寄りの経験が若い人に多くを教えてくれることについて、ALTのMs.Greenと話した内容である。英語を運用する上で必要な基礎的言語材料(単語、文法等)についての知識、文脈を把握した上で読解したり、表現したりする能力、英語を言い換えて表現する能力、日常的な事柄を英語で表現するための基礎的な能力等を検査できるようにした。単語の空欄補充問題では、文脈を読み取ったうえで知識を活用するようにした。また、英文の空欄補充問題では、本文の文脈に合わせて適切なものを補充させる形式にするなど、様々な観点から読解力を検査できるようにした。また、英語で表現する基本的な能力を検査できるようにした。

設問3の本文中の空欄に文脈から考えて適語を入れる問題及び設問7の本文と同じ内容になるよう英文中に適語を入れる問題は、それぞれ平均点は31.7%、17.2%と低く、文脈を的確に理解したり、理解した英文の内容を本文中に使われていない英語で表現したりする力に課題がある。

設問1、5の与えられた日本語の内容に合う英文を書かせる問題では、設問1では半数以上が2点以上

の得点であった一方、設問5では半数以上が0点であった。設問1は、間接疑問文を用いて表現すること、設問6は関係代名詞を使った適切な文を書くことができることがポイントであった。基本的な文法知識を使って英文で表現する力は身に付きつつあると考えられる。

5 「読むこと」「書くこと」に係る問題

高校生の広樹が、海外で学んだことについて、英語の授業で発表したという設定である。広樹は、海外での2度の滞在を通して多くのことを学ぶ。英語の大切さ、世界を知ることの重要性はもちろんのこと、自国の素晴らしさを再発見することもできた。これは数多くの留学生が経験することである。質問の答えを選択させたり、内容を要約した英文を完成させたり、内容を時系列で考えさせたり、文中の空欄に文脈から判断して適切な英文を補充させたりすることで、様々な観点から英語を読解する能力を検査できるようにした。また、初めて日本に来た外国の人に日本を紹介する五つ以上の英文で書かせることで、コミュニケーションが成立するように英語で適切に表現する能力を検査できるようにした。この設問では、コミュニケーションを妨げない綴りのミスなどは減点しないこととした。

設問5は、本文の内容を要約する問題であるが、平均正答率は17.9%と低かった。これは読解した英文を適切に要約する力を試す問題であるが文法知識と文脈を理解する力の両者が求められているため昨年同様に正解率は低かった。

設問6は本文を踏まえ、初めて日本に来た外国の人に日本を紹介する五つ以上の英文で書く問題であったが、満点の正答率は16.3%と低かった。しかしながら、無答の者は11.8%であり昨年の16.3%より大幅に減っている。五文以上は書けなかったものの、なんとか英語でコミュニケーションが成立するように表現しようとする態度は向上していると判断できる。自分のことを適切に相手に伝えるということを意識しながら、学習した英語を使って表現力を高める指導がさらに求められる。

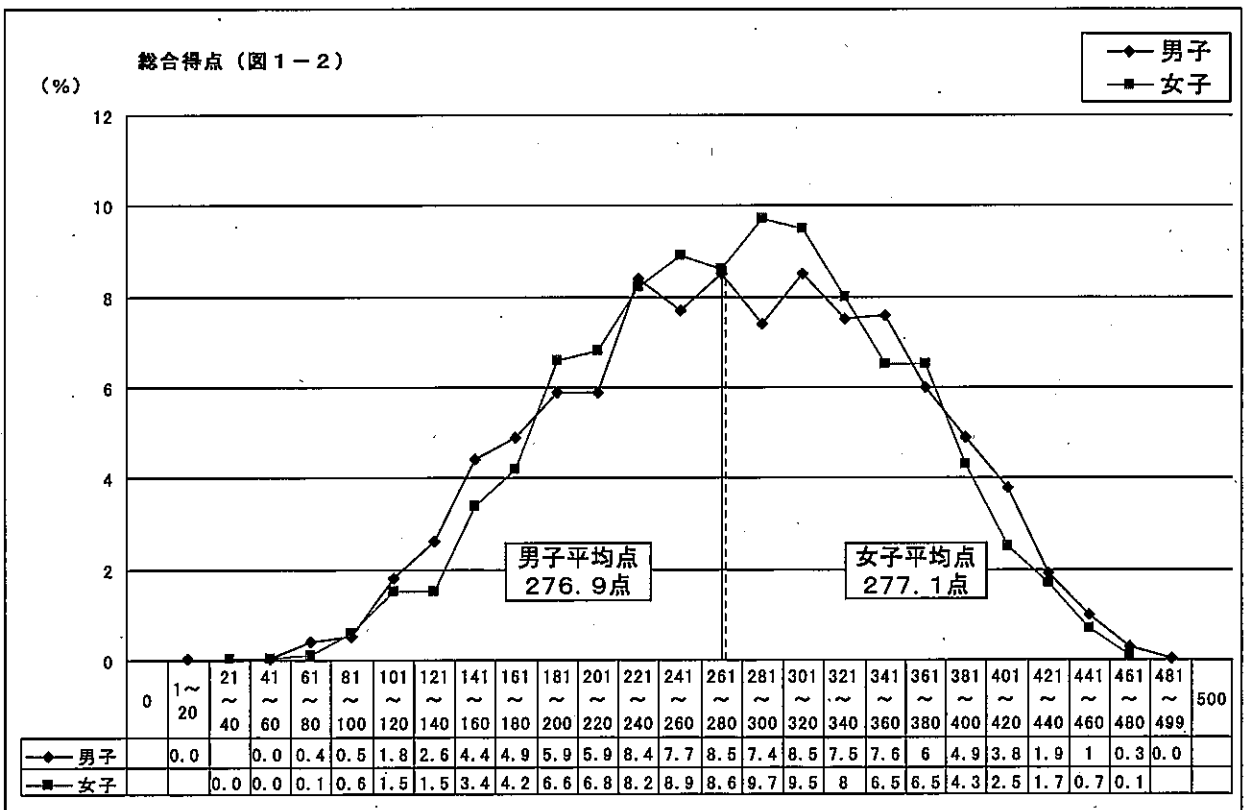
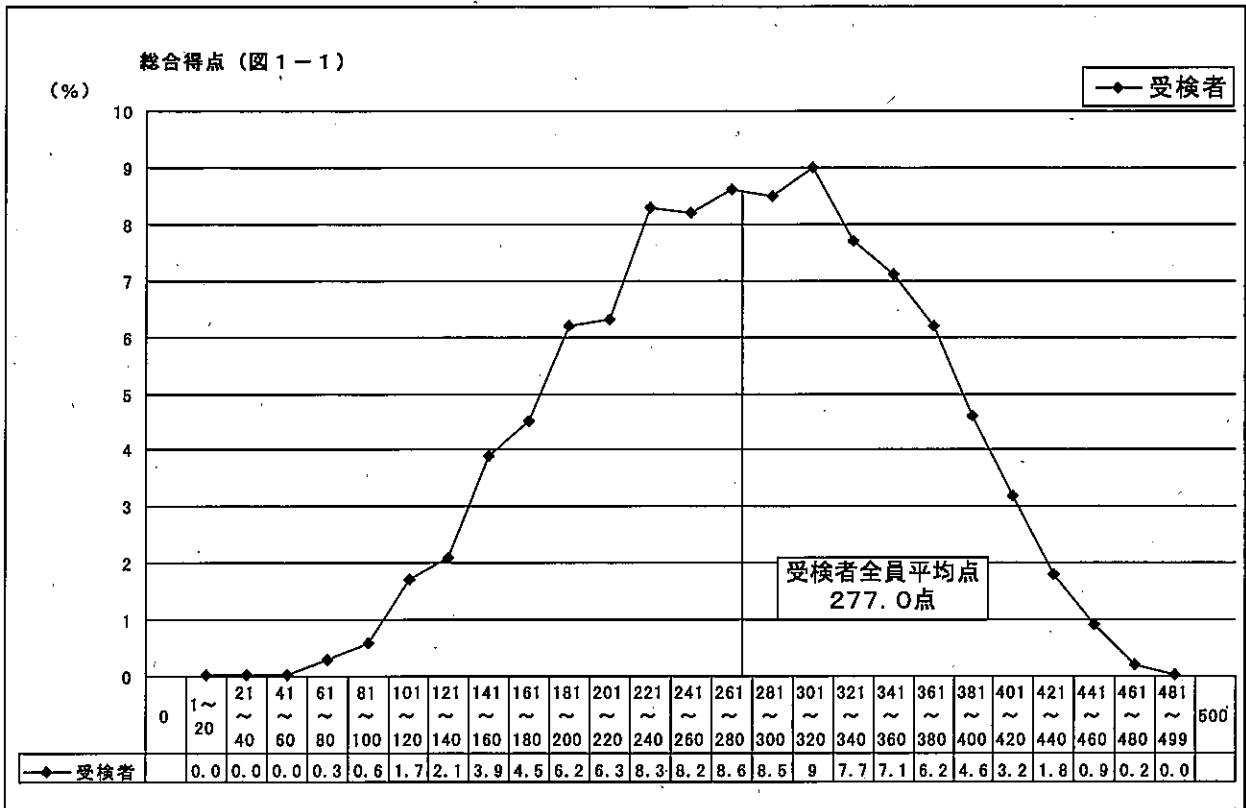
5 全体を通しての考察

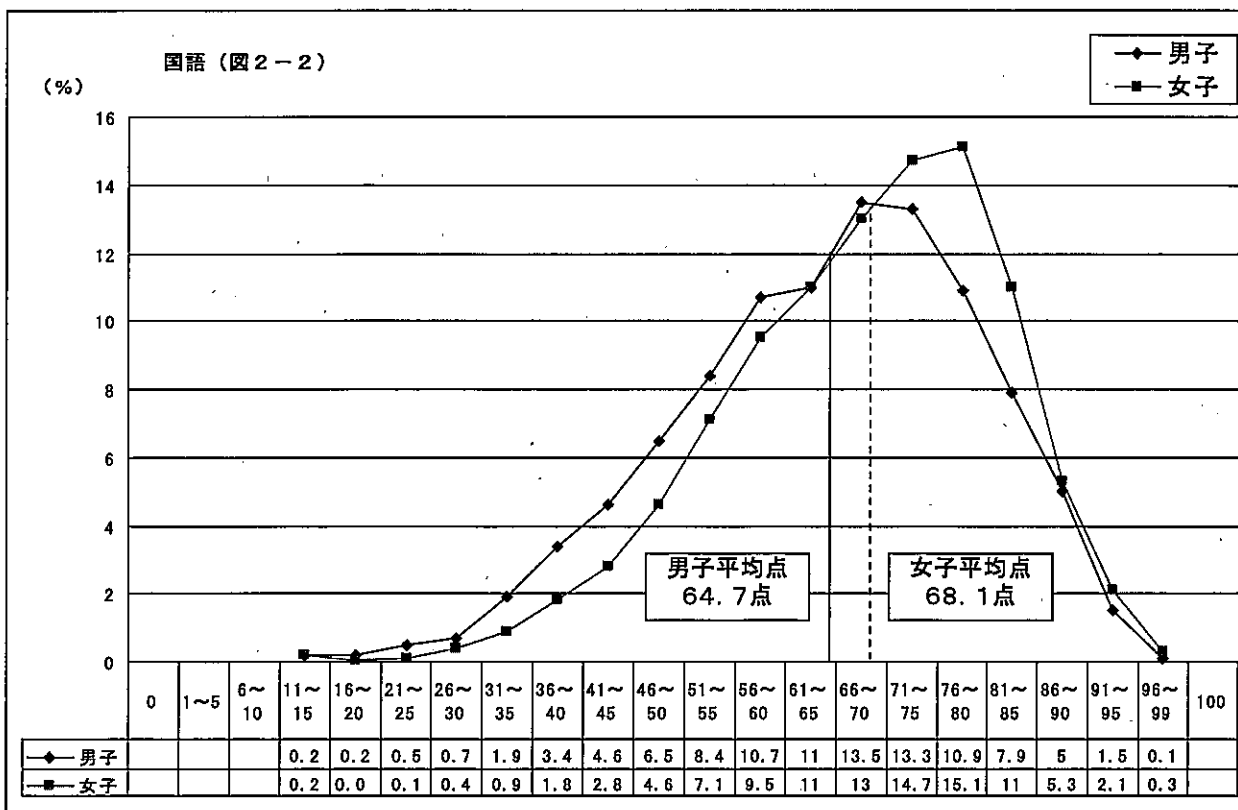
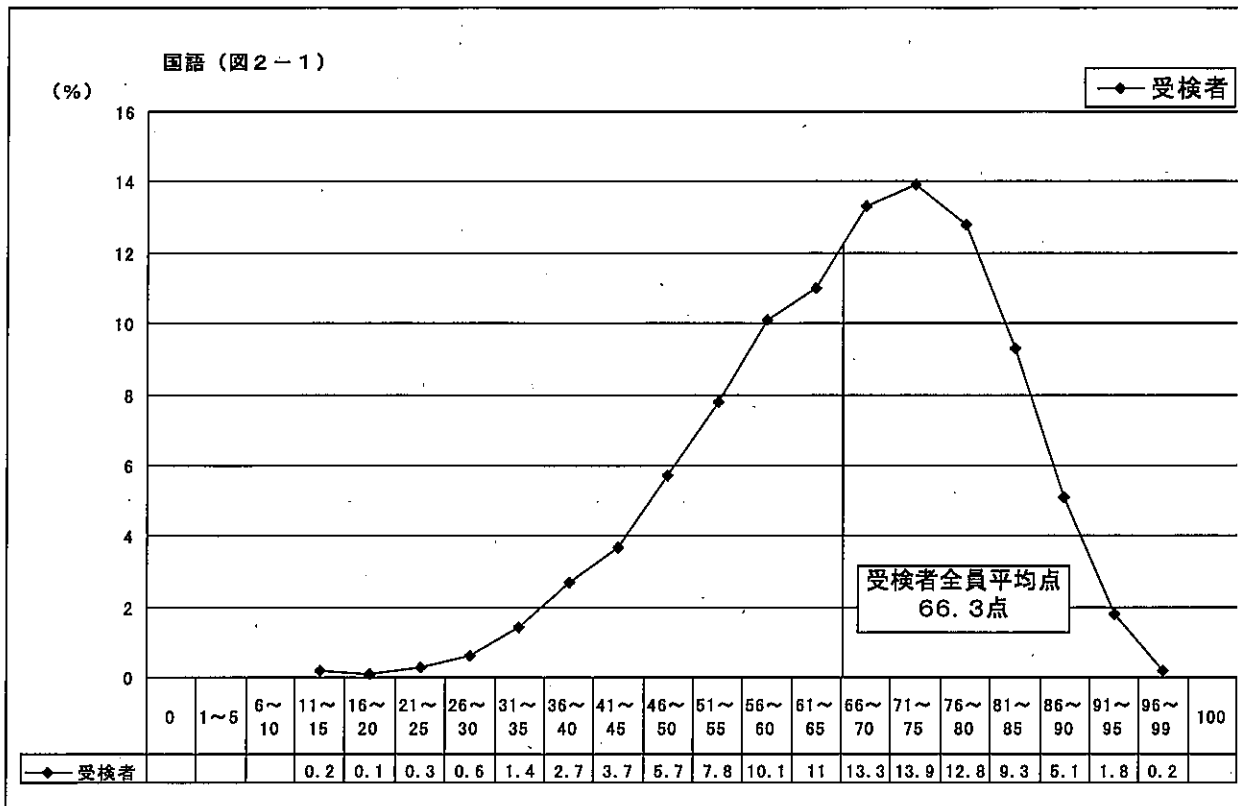
「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4領域について、知識・理解に偏ることなく、基本的な英語運用能力を検査できる問題とした。

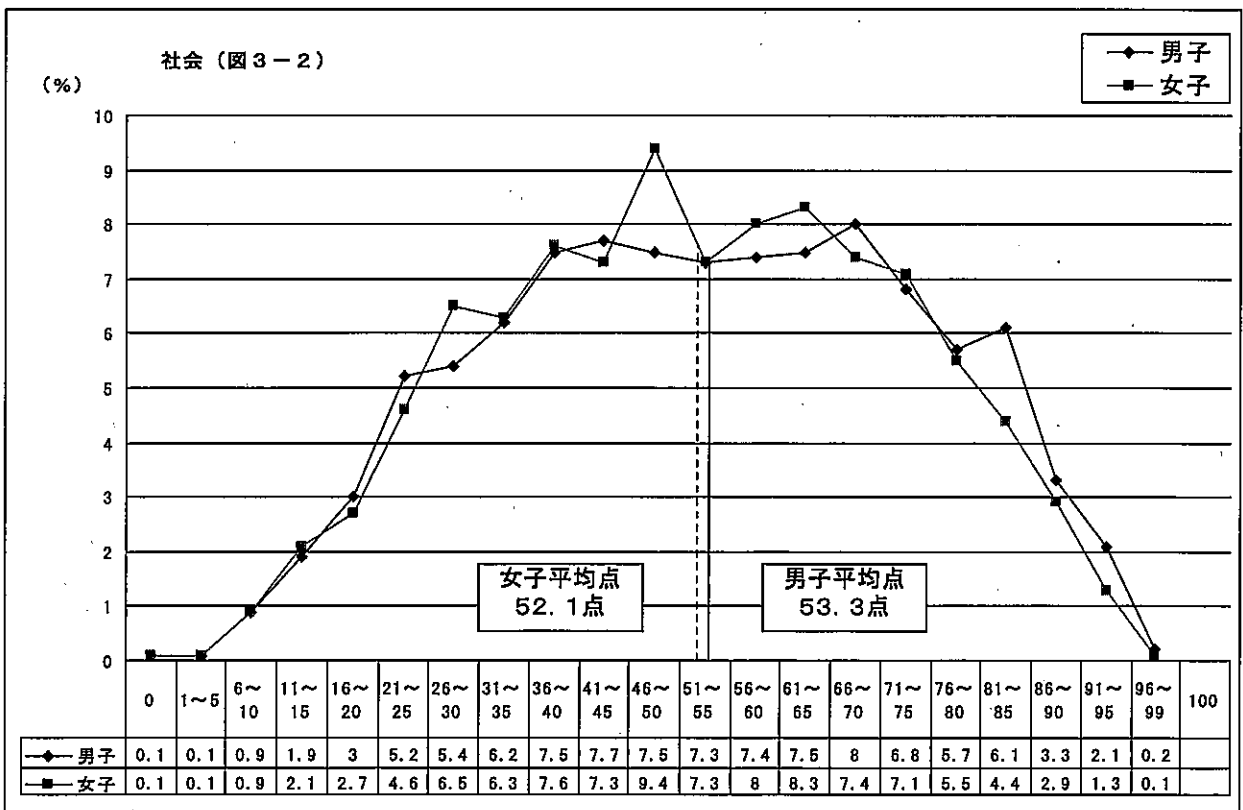
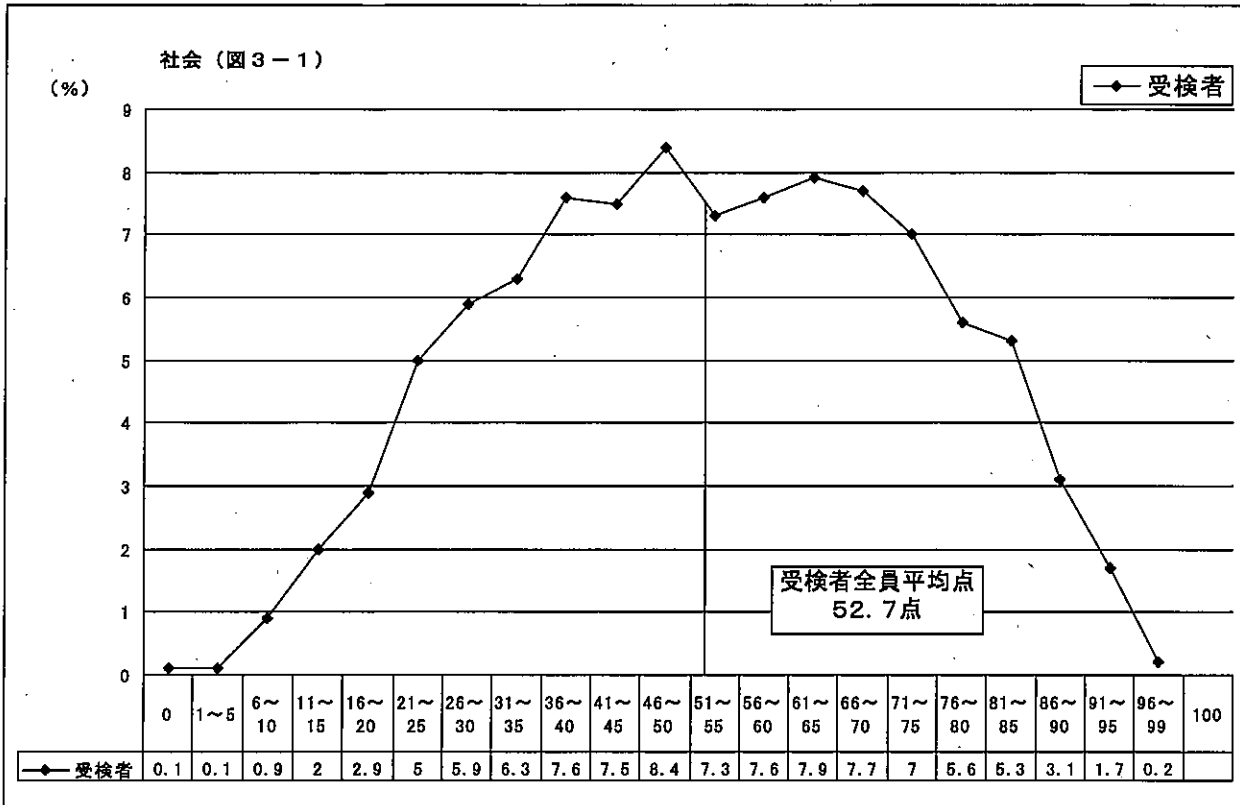
「聞くこと」については、基本的な能力は概ね良好と言える。

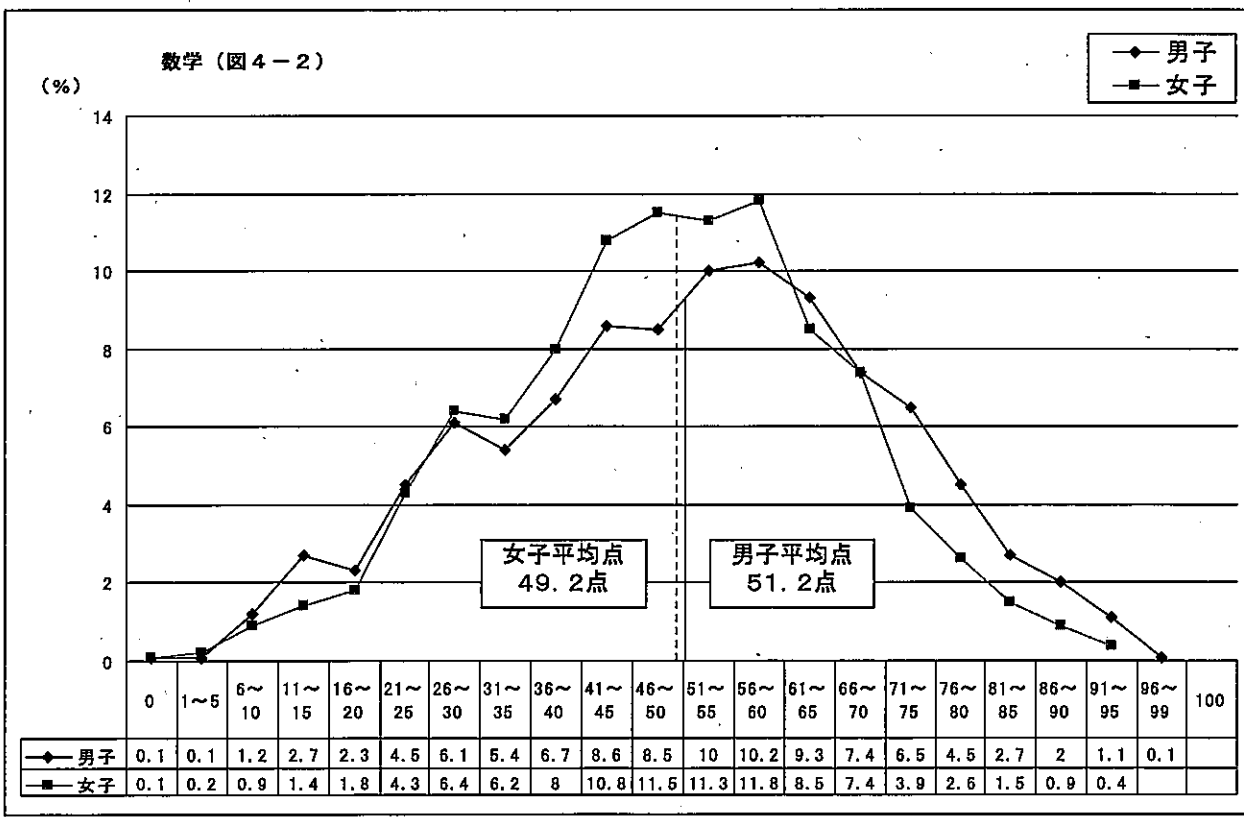
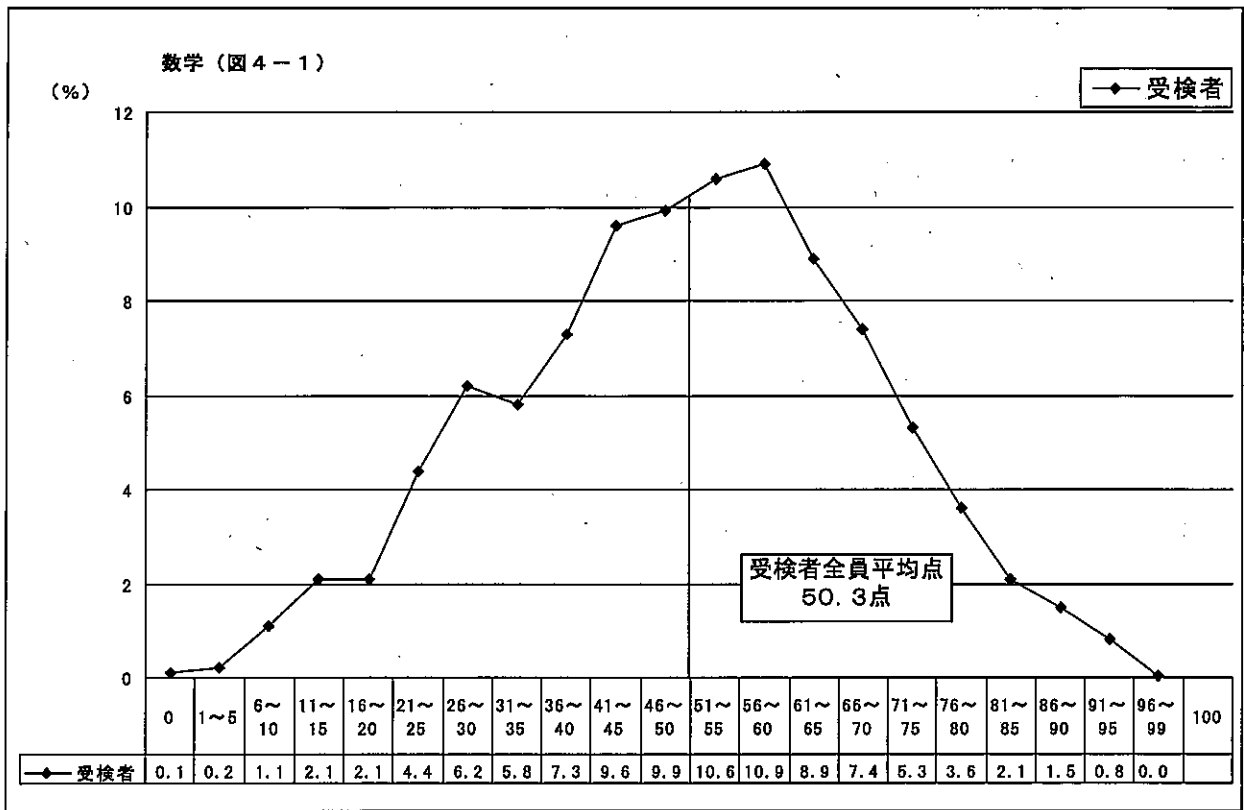
「読むこと」については、英文を読んで内容を理解できるかどうか、様々な観点から評価できるようにした。内容を理解した上で、文脈を踏まえて自分の表現で要約する力には課題が残る。

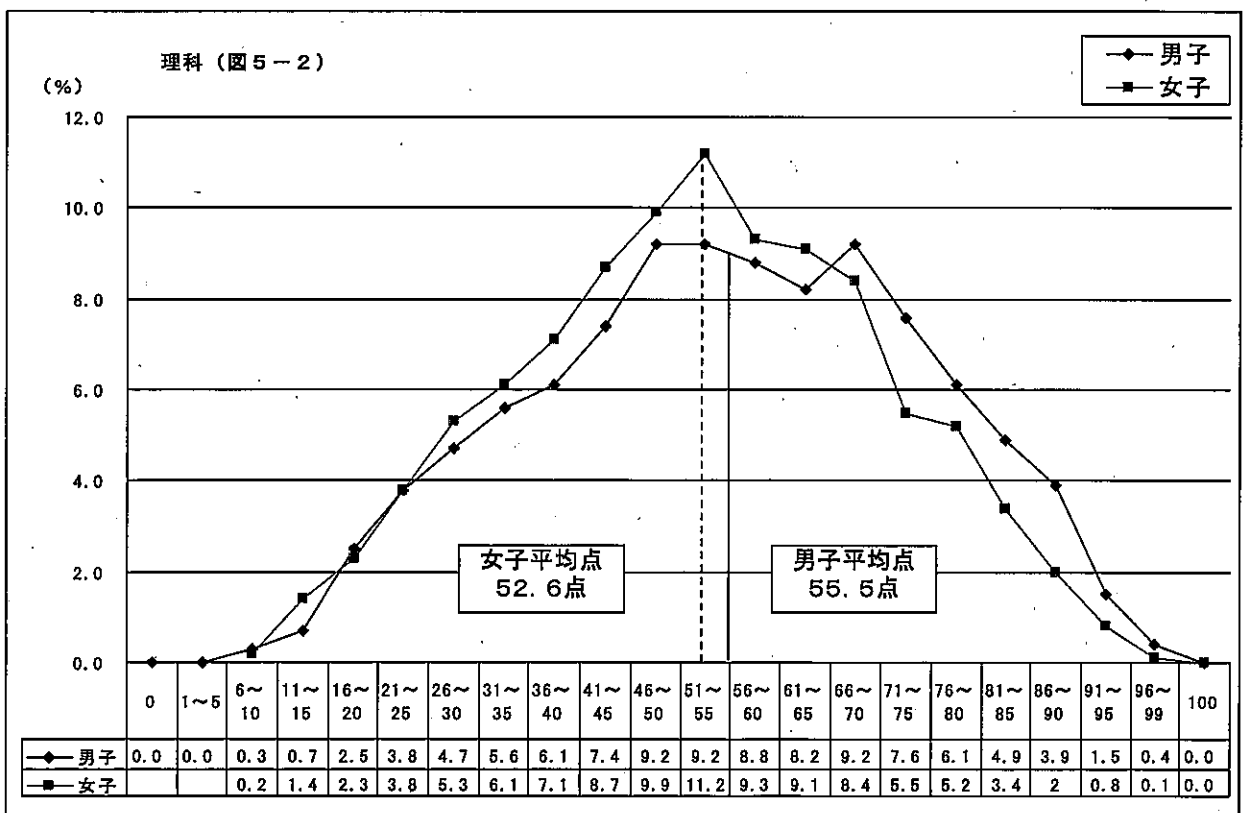
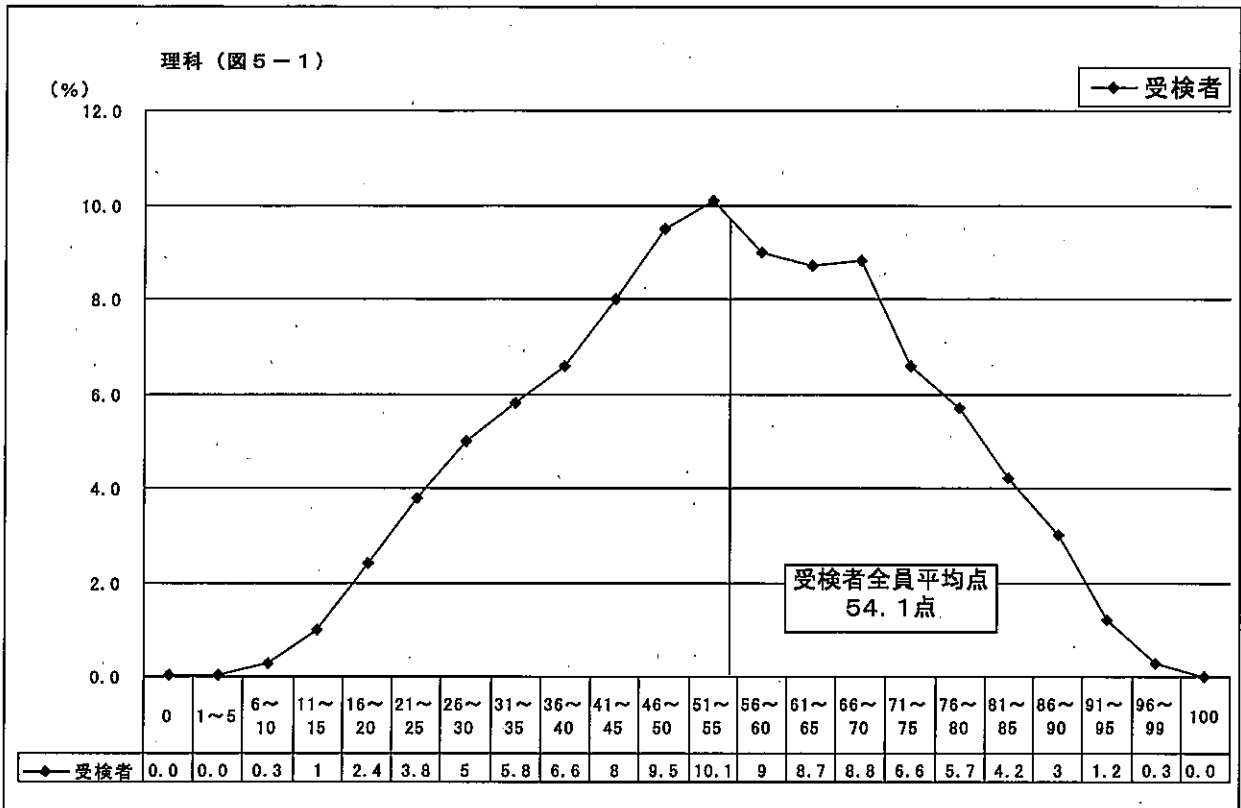
「書くこと」については、与えられた英文を理解した上で、その内容やテーマに関して自分の考えをまとめた英語で表現できる英語力の育成が求められる。同時に学習した文法事項等を使って、的確に表現する力の育成も今後の課題である。

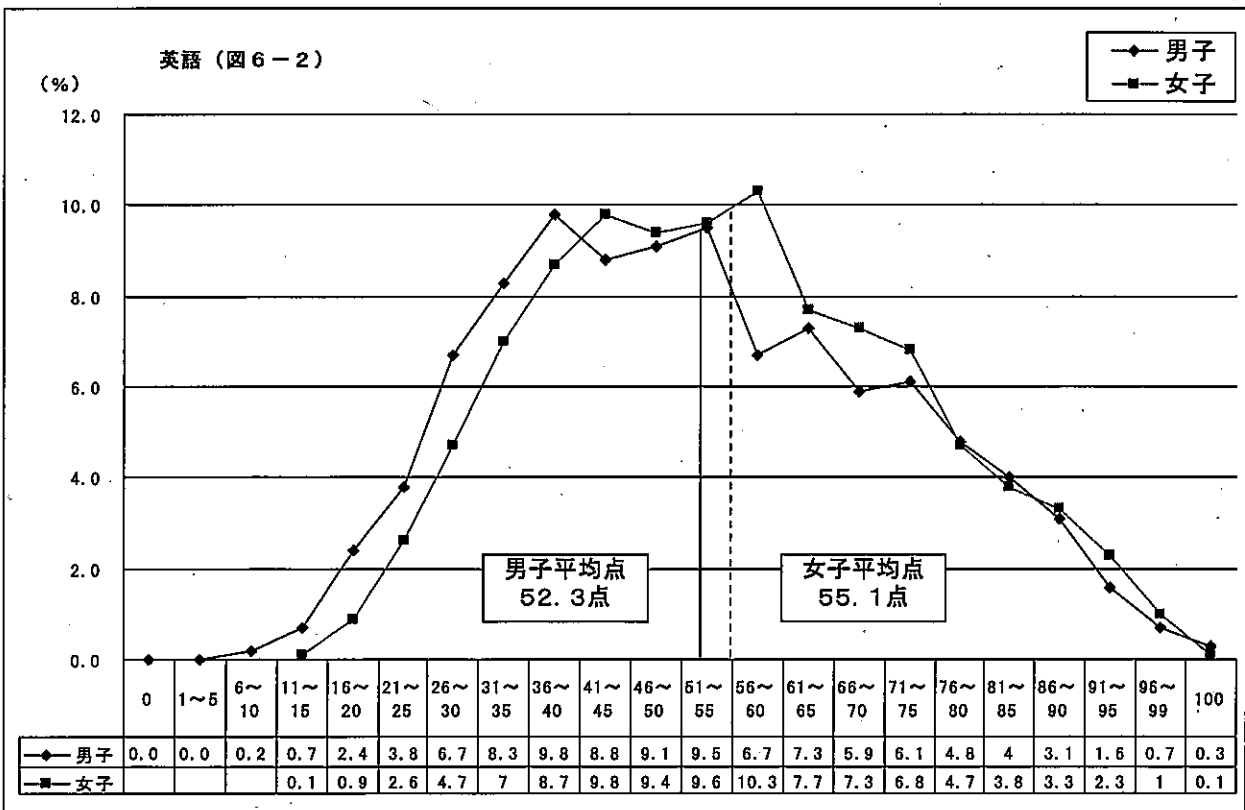
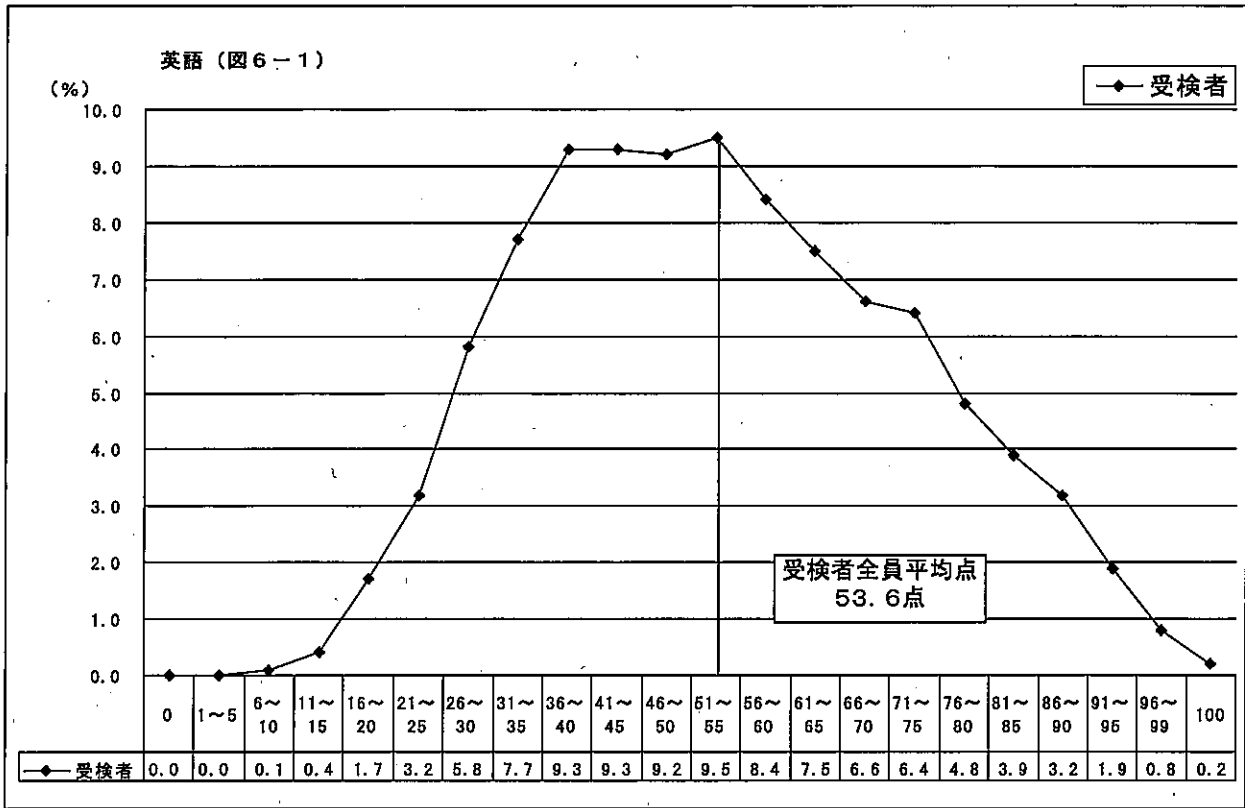






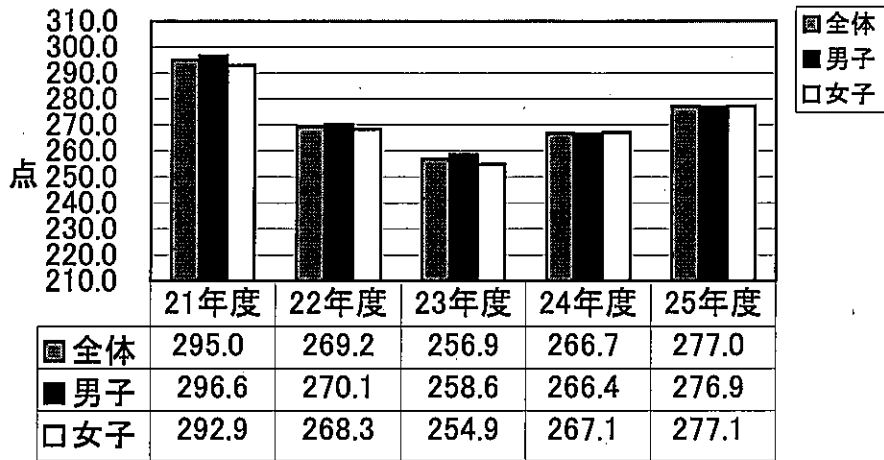




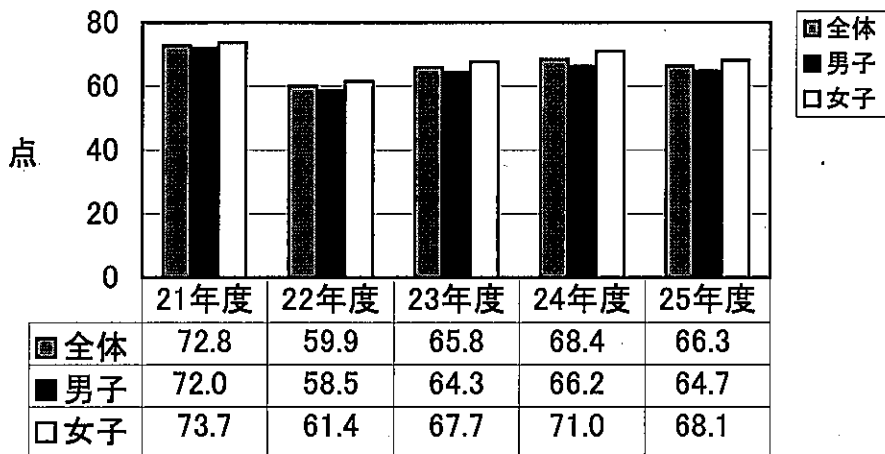


平成25年度 学力検査結果

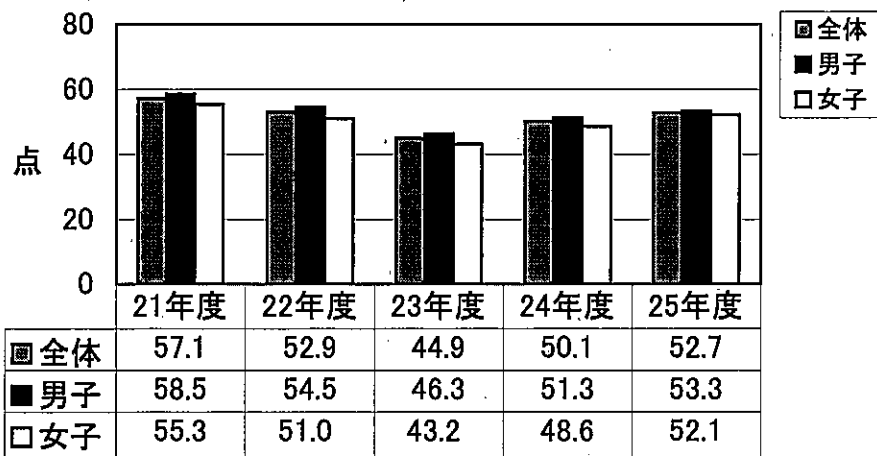
総合平均点(図1-3)



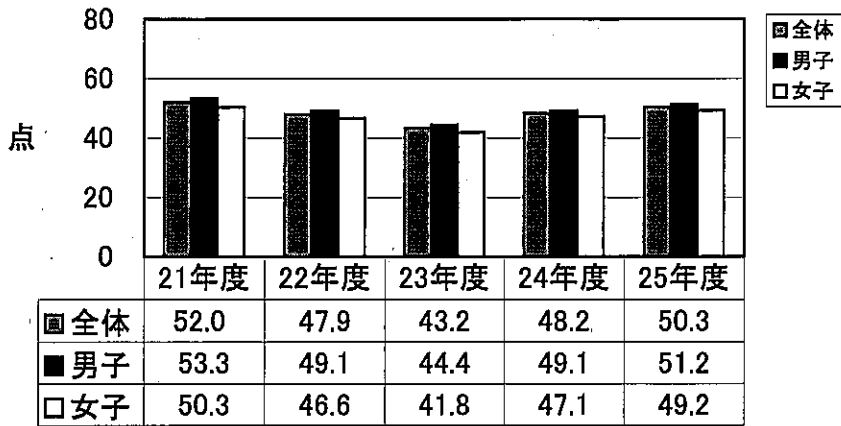
国語平均点(図2-3)



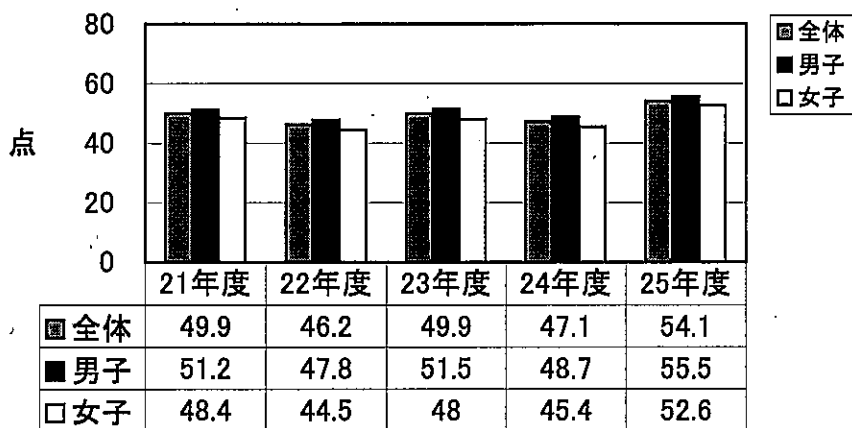
社会平均点(図3-3)



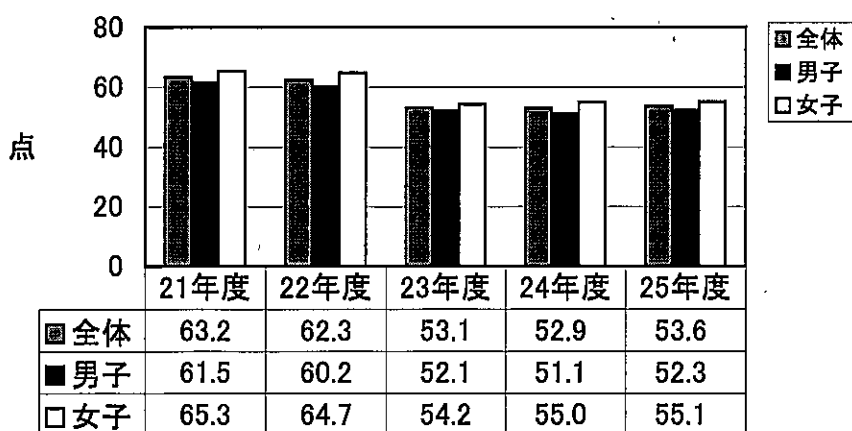
数学平均点(图4-3)



理科平均点(图5-3)



英語平均点(图6-3)



平成25年度 正答率調査表

【国語】

問 題		正答率	誤答率	無答率	
一	一	ア	99.8%	0.2%	0.0%
		イ	45.3%	50.6%	4.1%
		ウ	80.8%	17.6%	1.6%
		エ	97.1%	2.2%	0.6%
		オ	97.3%	2.4%	0.2%
	二	ア	88.0%	9.6%	2.4%
		イ	64.1%	30.2%	5.7%
		ウ	72.0%	20.4%	7.6%
		エ	90.2%	5.9%	3.9%
		オ	86.7%	7.1%	6.1%
	三	76.9%	20.0%	3.1%	
	四	51.0%	48.6%	0.4%	
	二	一	86.9%	12.9%	0.2%
		二	56.7%	35.1%	8.2%
三	一	86.5%	13.5%	0.0%	
	二	68.6%	31.2%	0.2%	
	三	49.8%	43.3%	6.9%	
	四	85.5%	14.3%	0.2%	
	五	(1)	71.8%	27.8%	0.4%
		(2)	83.1%	16.5%	0.4%
		(3)	38.4%	49.7%	11.9%

問 題		正答率	誤答率	無答率	
四	一	93.9%	6.1%	0.0%	
	二	74.5%	25.5%	0.0%	
	三	89.4%	10.0%	0.6%	
	四	8.6%	85.3%	6.1%	
	五	54.9%	44.1%	1.0%	
	六	46.9%	51.0%	2.0%	
	七	(1)	86.1%	9.8%	4.1%
		(2)	42.2%	46.5%	11.2%
	八	得点	人数	得点	人数
		0	1.8%	8	13.7%
		1	0.4%	9	16.7%
		2	2.7%	10	9.0%
		3	3.7%	11	5.7%
		4	4.9%	12	4.5%
		5	10.0%	13	1.2%
6		12.7%	14	0.2%	
7	12.9%	15	0.0%		

【社会】

問 題		正答率		誤答率	無答率	
		正答	部分点			
1	1	(1)	53.5%	46.5%	0.0%	
		(2)	3点	50.2%	49.4%	0.4%
			2点	0.0%		
		(3)	59.0%	41.0%	0.0%	
	(4)	4点	51.2%	33.1%	6.1%	
		3点	9.6%			
	2	(1)	63.3%	35.3%	1.4%	
		(2)	3点	56.7%	26.7%	11.2%
			2点	5.3%		
		(3)	63.3%	36.5%	0.2%	
		(4)	3点	31.4%	63.1%	5.5%
	2点		0.0%			
	(5)	68.0%	31.8%	0.2%		
	2	1	(1)	3点	52.2%	45.9%
2点				1.6%		
(2)			56.9%	43.1%	0.0%	
(3)			32.9%	66.7%	0.4%	
(4) 大名			28.0%	56.3%	15.7%	
(4) 記号		51.6%	46.9%	1.4%		
(5)		14.7%	85.3%	0.0%		
2		(1)	3点	44.3%	34.7%	13.9%
			2点	7.1%		
		(2)	3点	51.0%	48.2%	0.4%
(3)		3点	74.5%	17.8%	3.7%	
	2点	4.1%				

問 題		正答率		誤答率	無答率	
		正答	部分点			
2	2	(4) ①	2点	33.1%	42.7%	9.0%
			1点	15.3%		
		(4) ②	71.8%	28.0%	0.2%	
3	1	(1)	3点	73.9%	17.1%	8.2%
			2点	0.8%		
		(2)	3点	78.0%	11.0%	4.3%
			2点	6.7%		
	2	(1)	42.9%	56.9%	0.2%	
		(2)	3点	41.6%	40.8%	12.2%
	2点		5.3%			
	3	(1)	3点	39.0%	61.0%	0.0%
2点			57.8%	28.6%	11.2%	
4	(1)	3点	84.3%	15.7%	0.0%	
		2点	73.7%	25.7%	0.6%	
4	1	(1)	41.2%	58.8%	0.0%	
		(2)	63.5%	36.3%	0.2%	
		(3)	64.3%	29.6%	6.1%	
	2	(1)	3点	50.8%	48.4%	0.8%
			2点	34.1%		
	(2)	3点	46.1%	18.6%		
		2点	1.2%			
	3	7.1%	91.4%	1.4%		
	4	(1)	3点	29.2%	66.7%	3.1%
2点			1.0%			

【数 学】

問 題		正答率	部分正答率	誤答率	無答率
1	1	98.2%	/	1.8%	0.0%
	2	86.9%	/	11.4%	1.6%
	3	90.4%	/	9.4%	0.2%
	4	93.9%	/	5.1%	1.0%
	5	92.4%	/	7.6%	0.0%
	6	69.2%	/	30.0%	0.8%
2	1	72.0%	/	17.8%	10.2%
	2	68.2%	/	28.6%	3.3%
	3	68.8%	/	29.4%	1.8%
	4	79.0%	/	19.6%	1.4%
	5	56.7%	0.6%	33.3%	9.4%
3	1	78.6%	/	19.6%	1.8%
	2	76.3%	/	21.6%	2.0%
	3	26.3%	/	49.8%	23.9%
	4	記号	65.7%	/	26.5%
	理由	27.8%	11.6%	43.9%	16.7%

問 題		正答率	部分正答率	誤答率	無答率	
4	1	(1)	65.1%	/	25.3%	9.6%
		(2)	14.9%	8.0%	68.2%	9.0%
	2	42.2%	/	40.0%	17.8%	
	3	(1)	52.4%	/	38.8%	8.8%
(2)		7.6%	/	44.7%	47.8%	
5	1	(1)	69.6%	/	23.3%	7.1%
		(2)	56.3%	/	26.3%	17.3%
		(3)	24.7%	/	40.0%	35.3%
	2	(1)	22.9%	/	55.3%	21.8%
		(2)	11.4%	0.2%	44.5%	43.9%
6	1	28.0%	6.3%	42.2%	23.5%	
	2	19.6%	37.8%	28.2%	14.5%	
7	1	46.7%	/	40.2%	13.1%	
	2	0.8%	/	49.6%	49.6%	

【理 科】

問 題		正 答 率		誤答率	無答率	
		正 答	部分点			
1	1	88.2%	0.4%	9.0%	2.4%	
	2	66.1%	/	33.9%	0.0%	
	3	37.6%	/	62.0%	0.4%	
	4	52.2%	0.0%	36.3%	11.4%	
	5	63.3%	16.1%	18.0%	2.7%	
2	1	26.1%	8.0%	62.7%	3.3%	
	2	40.6%	/	59.4%	0.0%	
	3	21.6%	7.8%	62.9%	7.8%	
	4	34.5%	/	65.5%	0.0%	
5	①	42.9%	1.8%	53.3%	2.0%	
	②	85.7%	/	14.3%	0.0%	
3	1	①	56.9%	/	43.1%	0.0%
		②	82.0%	/	18.0%	0.0%
	2	26.1%	3.3%	54.1%	16.5%	
	3	77.1%	/	22.9%	0.0%	
4	1	①	91.2%	/	8.8%	0.0%
		②	83.9%	/	15.9%	0.2%
	2	66.1%	/	31.8%	2.0%	
	3	72.2%	1.0%	22.9%	3.9%	
	4	29.2%	/	55.3%	15.5%	

問 題		正 答 率		誤答率	無答率	
		正 答	部分点			
5	1	79.4%	9.2%	7.3%	4.1%	
	2	①②	75.1%	/	24.7%	0.2%
		③④	71.4%	/	28.4%	0.2%
	3	49.0%	/	50.6%	0.4%	
	4	①	87.8%	0.2%	10.6%	1.4%
		②	58.8%	0.2%	34.1%	6.9%
6	1	81.2%	0.2%	16.1%	2.4%	
	2	64.7%	8.6%	18.2%	8.6%	
	3	63.9%	/	29.0%	7.1%	
	4	48.8%	/	50.4%	0.8%	
	5	31.0%	3.1%	57.1%	8.8%	
7	1	61.8%	/	36.5%	1.6%	
	2	49.6%	/	49.6%	0.8%	
	3	25.9%	1.8%	58.8%	13.5%	
	4	35.3%	/	64.3%	0.4%	
	5	18.2%	/	64.3%	17.6%	
8	1	47.1%	/	48.2%	4.7%	
	2	36.7%	30.8%	22.2%	10.2%	
	3	68.6%	/	31.2%	0.2%	
	4	60.0%	/	36.9%	3.1%	
	5	26.9%	/	59.6%	13.5%	

【英語】

問題		正答率	誤答率	無答率	
1	A	90.6%	9.0%	0.4%	
	B	93.5%	6.5%	0.0%	
	C	96.1%	3.5%	0.4%	
	D	85.7%	11.4%	2.9%	
2	1	92.4%	7.6%	0.0%	
	2	95.5%	4.5%	0.0%	
	3	91.0%	9.0%	0.0%	
	4	92.4%	7.6%	0.0%	
3	1-1	44.3%	55.7%	0.0%	
	1-2	76.3%	23.7%	0.0%	
	1-3	95.3%	4.7%	0.0%	
	2-1	89.6%	10.2%	0.2%	
	2-2	60.0%	39.8%	0.2%	
	2-3	84.1%	15.7%	0.2%	
4	1	4	13.3%	/	/
		3	22.9%		
		2	20.2%		
		1	8.6%		
		0	35.1%		
		0点のうち無答者の割合→			
	2	①	74.7%	25.3%	0.0%
		②	71.6%	28.4%	0.0%
		③	54.9%	43.1%	2.0%
	3	A	49.2%	46.9%	3.9%
		B	22.9%	67.6%	9.6%
		C	23.1%	67.8%	9.2%
	4	Ⓐ	85.1%	14.7%	0.2%
		Ⓑ	62.9%	36.7%	0.4%
		Ⓒ	62.4%	36.7%	0.8%
	5	4	36.7%	/	/
		3	4.7%		
		2	5.1%		
		1	1.4%		
		0	52.0%		
		0点のうち無答者の割合→			
6	4	5.5%	/	/	
	3	6.9%			
	2	7.8%			
	1	10.2%			
	0	69.6%			
	0点のうち無答者の割合→				16.5%
7	①	10.8%	82.0%	7.1%	
	②	23.5%	58.0%	18.6%	

問題		正答率	誤答率	無答率
1	①	78.6%	21.0%	0.4%
	②	56.9%	41.0%	2.0%
2	4	4	40.6%	/
	2	2	39.8%	
	0	0	19.6%	
	2点, 0点のうち, 無答の割合			
	1つが無答の者→			
2つが無答の者→			3.5%	
3		26.9%	69.8%	3.3%
4		24.1%	73.1%	2.9%
5	A	27.6%	56.5%	15.9%
	B	12.9%	54.7%	32.4%
	C	6.3%	61.0%	32.7%
	D	24.9%	56.3%	18.8%
5	得点	得点者率	/	/
	10	16.3%		
	9	11.6%		
	8	12.0%		
	7	5.9%		
	6	10.2%		
	5	5.3%		
	4	7.1%		
	3	3.3%		
	2	3.7%		
	1	2.7%		
	0	21.8%		
	解答の正誤にかかわらず, 文を書いた者の割合			
6文以上書いた者→			11.4%	
5文書いた者→			53.7%	
4文書いた者→			7.6%	
3文書いた者→			4.9%	
2文書いた者→			6.5%	
1文書いた者→			4.1%	
無答の者の数→			11.8%	